

『満文金瓶梅』に見られる清朝初期の満漢言語接触

The language contact between Chinese and Manchurian at Manchurian *Jin Ping Mei* in the beginning of Qing dynasty

明代に成立した長編白話小説『金瓶梅』は清朝初期に満州語に翻訳されたが、その行間のところどころに漢字が記されている。この『満文金瓶梅』の成立の謎と、漢字が付された理由を考察する。

荒木典子

Araki Noriko

首都大学東京人文科学研究科 准教授



Abstract

China had contacted with a lot of different cultures which were brought by the changes of dynasties. *Manchurian Jin Ping Mei*, which is translated from the Chinese vernacular novel *Jin Ping Mei* in Ming dynasty, resulted from the language contact between Chinese and Manchurian. This translation was published in 1708, the Emperor Kang Xi's era. There are mainly three mysteries in *Manchurian Jin Ping Mei*. First, who translated? Second, which text in Chinese did the translator base on? Third, we often could find Chinese characters between the lines, what is the purpose of them? This study analyzes the second and third mysteries. Teruhiro Hayata (1998) discovered basic text should be one of the books which were published in 1638-1644. We are going to compare the translation with these books. About the Chinese characters between the lines, some of researchers note that Chinese characters often appear next to person's name, place-name, and the names of government post and express signification of these nouns. And they mention that the purpose of these Chinese characters is to let Manchurians understand unfamiliar things from Chinese culture. The explanation is not satisfactory. Because most of all Manchurians didn't understand Chinese in the Emperor Kang Xi's era, a lot of Chinese novels were translated to Manchurian. The readers shouldn't understand what the Chinese characters explain. There may be a system that readers could study the Chinese culture and language by reading this translation.

Keywords translation, original text, Chinese characters between the lines

はじめに

『金瓶梅』は明代に成立した長編白話小説であり、『三国演義』、『水滸伝』、『西遊記』と並ぶ四大奇書の一つである。豪商西門慶を主人公とし彼と妻妾たちの日常を描いたもので、生々しい性愛描写のイメージが独り歩きする傾向があるが、登場人物による会話文が多く、口語の資料としての価値が高いことも夙に有名である。この『金瓶梅』の最初の翻訳は満洲語版であった。早田 1998:4 に拠れば、『金瓶梅』が西欧に知られたのは、その満洲語からの翻

訳であるという。『金瓶梅』のみならず、清代には多くの漢語文学作品が満洲語に翻訳された。その理由は主に、清初の満洲八旗は漢語がわからなかった、統治者が漢族の統治階級を理解する必要に迫られていた、満族自身の文化的な要求があった、の三つだったという(季永海 2009:41)。入関前は軍事、法律、歴史に関わるものが翻訳され、入関後は経典や文芸作品も翻訳されるようになった(同:42-43)。『満文金瓶梅』をめぐるには不明な点が多々あるが、まず以下の三つの問題が挙げられる。

①誰が翻訳したのか。

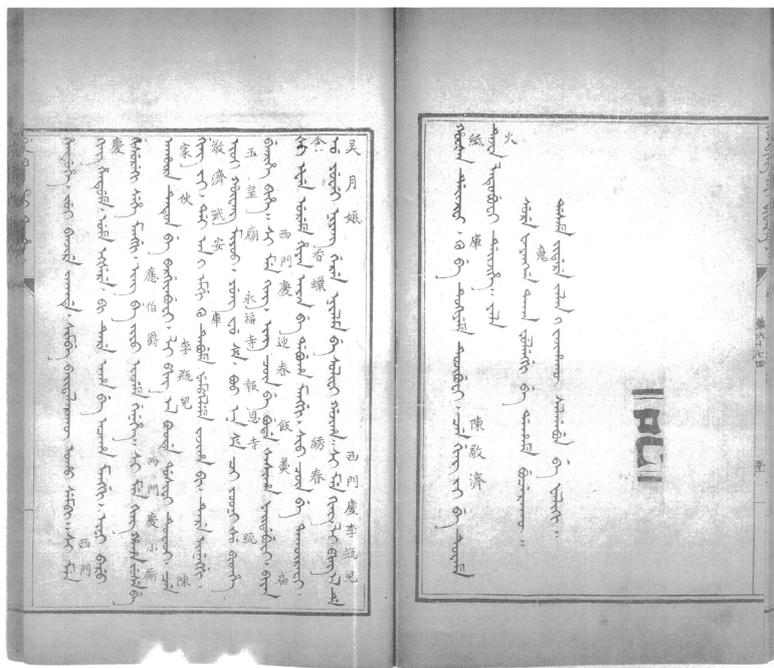


図 『満文金瓶梅』（京都大学人文科学研究所蔵本）

②金瓶梅は複数の版本が存在するが翻訳の底本（元になった本）はどれなのか。

③満文本文の行間に時折書かれている漢字語彙は何のためにあるのか。

①については和素や徐元夢などの名が挙がっているが決定打はない。本稿は②、③についての初歩的な調査報告である。

1. 『満文金瓶梅』について

1.1 『満文金瓶梅』の序文

現存する本書の刊本には巻頭に序文があり、「康熙四十七（1708）年五月穀旦」と記されている。季永海 2009:46 に拠れば順治・康熙年間（1644-1722）は漢語小説類の翻訳のピークだったという。

序文には以下の一節が見える。

ememu ursei hendurengge, ere bithe. ming gurun
-i sula bithei niyalma lu-nan, yan-sung, yan-ši-fan

-i ama juse be darime banjibuhangge sembi. inu
waka be sarkū. gūnin ilibuha targacun obuhangge,
getuken iletu ofi, tuttu ubaliyambubufi, bi šolo de
dasatame tokto buha.

（或人の言うには、本書は明の逸儒蘆楠が、嚴嵩・嚴世蕃父子を諷刺して著したものである。その真否は知らぬが、意を留めて訓戒を成していること明らかなので【満洲語に】翻訳させて、私が暇な時に推敲した）¹⁾

この記述通りならば翻訳者と序文の筆者は別人ということになるが、両者の名前は書かれていない。また、本来『金瓶梅』諸版本についていた序跋の類は翻訳されていない。このことについて季永海（2007:65）は「満文訳本には一つ共通した特徴がある。原書の序文や跋文を削除し、あるものは自分で序文を付け加え、物語に入る。この簡潔で明快な形式は早期の満族文学の特徴のひとつでもある²⁾」と指摘している。

1.2 『満文金瓶梅』の版本

現存する版本には、以下のようなものがある。

【刊本】

- a. 中央民族大学図書館蔵本。全百回、六函四十冊。匡郭内のり高さ 18.5cm、幅 14cm、白口、単魚尾、四周双辺。半葉九行、毎行字数不等、竹紙印³⁾。
- b. 中国国家図書館蔵本。
- c. 静嘉堂文庫蔵本。
- d. 天理図書館蔵本。
- e. 趙則誠先生蔵本（残本）。
- f. 中国社会科学院民族研究所蔵本（残本）。
- g. 北京民族文化宮蔵本（残本）。
- h. カナダ・トロント大学東亜図書館蔵本（アメリカ・アジア文化研究センター蔵本の影印だが、Geside Eastern Library of Princeton University 蔵本の影印の可能性もあるという）。以上の刊本 a-h については王汝梅 2012 に所在、及び書誌情報が記載されている。
- i. 京都大学人文科学研究所蔵本。
- j. 中国・首都図書館蔵本（残本）。

【抄本】

いずれも王汝梅 2012 の記述による。

- k. 大連図書館蔵本。（タイトルは『世態炎涼』）
- l. 吉林大学図書館蔵（精写本）。
- m. 中国・首都図書館蔵本（残本、「孔徳学院」の印あり）。

筆者が実際に見たのは c, i, j, m である。刊本 c, i, j の書誌情報は a と同じであり、同版と思われる。Chinese Material Center, INC. San Francisco 1976 という縮小した影印本もある。この本は稀に落丁が見られるが i と同版と考えられる。本稿の調査で主に使ったのはこの影印本である（落丁は i で確認した）。

注1) 翻訳は早田 1998:15 による。

- 2) 以下、特に断りのない限り日本語訳は筆者（荒木）による。
- 3) 宋代以降、竹を原料として作った茶色がかった脆弱な紙。（堀川 2010:119）

2. 翻訳の底本について

年代から考えると、底本の候補となり得る『金瓶梅』には三系統ある。およその刊行年代順に並べると以下ようになる。

- ア. 『金瓶梅詞話』万曆 45 (1617) 年以前刊。詞話本と呼ばれる。年代は現存最古の刊本の序文による。複数の刊本が現存しているが、一部分が差し替えられている他は皆同版と見なせる。
- イ. 『新刻繡像（批評）金瓶梅』崇禎年間 (1628-1644) 刊。改訂本、または崇禎本と呼ばれる。アにかなりの改訂を施している。第一回の内容が異なり、各回目（タイトル）も変更が多い。アにおけるプロットの矛盾、誤字脱字、わかりにくい語彙も改められている。複数の刊本があり、版式から二つの系統に分かれる（後述）。
- ウ. 『第一奇書金瓶梅』(1695)。張竹坡本と呼ばれる。張竹坡が批評（コメント）をしているため。内容はイとほぼ変わらない。

アとイはかなりの違いがあり、イとウの差はそれほど大きくない。各回目を見るだけでも、または第一回を読むだけでも、満文本がアに基づいたものではないことはすぐにわかる。では、改訂本か張竹坡本なのかということになるが、早田 1998:4-5 では張竹坡本である可能性を否定している。

『満文金瓶梅』の底本が目につく限り皆、張竹坡評本とされているのは不可解である。（中略）例えば、第四十八回末尾の蔡太師の上奏文七条に『詞話本』及び『崇禎本』は「端的上面奏行【词話本：行，崇禎本：着】那七件事」として一千字近くを費やしているのに對し、『張竹坡本』では七条を五条にし且つ「大約上面奏着」として僅々五十字以下の箇条書、前文を入れても百字に満たない簡略な物にしてしまっている。『満文金瓶梅』では、wesimbuhe baita ya nadan hacin seci、《上奏した事はどんな七件かと言えば》として、三十二丁表から三十九丁裏まで八丁（十六頁）近くを費やして

翻訳している。底本の『詞話本』でない事が明らかである以上、『張竹坡本』を底本にして翻訳し部分的に『詞話本』なり『崇禎本』なりから本文を持って来たとしなない限り、このような翻訳の底本となりうる物は、現在本稿の筆者の知る限り、『崇禎本』系統のものしか無い。それとても筆者の眼にしうる『崇禎本』そのままの翻訳とはとても言える代物でない。満訳に際しての故意の簡略化、不注意による脱落、誤訳を考慮しても猶問題になる箇所があるのである。それが『崇禎本』諸本を綿密に勘校する事により解決されるのかどうか現在明らかでない。

複数残っている「崇禎本」（「改訂本」）の中のどれであるか、というところまで絞られた。勿論、未発見の版本であるという可能性もあるが、今回の調査で一つの系統を候補から消すことができたのである。

周文業 2011:1 に拠れば、現在残っている改訂本は版式の違いから以下の二つの系統に分けられる。

一 北京大学図書館蔵本（北大本）を代表とする系統。天理大学図書館蔵本、上海図書館蔵甲本及び乙本、天津図書館蔵本など。版式の特徴は、每半葉十行、每行二十二字、每半葉合計二百二十字、一葉は四百四十字になる。

二 内閣文庫蔵本を代表とする系統。東京大学東洋文化研究所蔵本（東大本）、北京首都図書館本（首図本）など。版式の特徴は每半葉十一行、每行二十八字、每半葉合計三百八字、一葉は六百十六字になる。

二つの系統は、版式は異なるが文章は基本的に同じである。しかし、原稿を書き写す時や製本する時に手違いがあったらしく、二の系統、またはその中のいずれかの版本にしか見られない脱落があるという。以下、今回の問題に関わるものだけ取り上げて論じる。

【周文業 2011 が指摘する二の系統の脱落箇所（一部）】

- i) 二の系統の東大本、内閣本、首図本を一の系統である北大本と比べると、第 59 回 42 葉～43 葉の間から 616 文字（二の系統の一葉分の字数）脱落していることがわかる。
- ii) 二の系統の東大本、内閣本、首図本の第 43

回 17 葉からは 20 字脱落している。

- iii) 二の系統の東大本、内閣本、首図本の第 77 回 34 葉から 17 字脱落している。

『満文金瓶梅』でこの箇所の内容を確かめたが脱落は確認できず、一の系統の天津本と一致する。具体例として iii) の状況を紹介する。

北大本・第 77 回・第 34 葉・表・第 7 行

廉使趙訥綱紀肅清市民服習，提學副使陳正彙操砥礪之行嚴督率之條，兵備副使雷啟元軍民咸服，…

（廉使趙訥は、綱紀肅正にして、士民服習す。提學副使は、砥礪の行を操り、督率の条を嚴にす。兵備副使雷啟元は…）¹⁾

東大本・第 77 回・第 34 葉・表・第 4 行

廉使趙訥綱紀肅清市民服習，（脱落）兵備副使雷啟元軍民咸服，…

北大本の下線部が東大本では脱落している。周文業 2011:17 では、この部分は公文（原文は“邸報”＝「官報」となっている）であるため大変わかりにくく、書写する時に脱落してしまったのであろう、と述べている。しかし満文本では第 77 回・第 35 葉・表・第 5-6 行に訳出されている。

以上より、東大本を始めとする二の系統は満文本の底本の候補から外することができる。

注 1) 日本語訳は小野忍・千田九一訳『金瓶梅』1974 年岩波文庫による。

3. 漢字語彙の併記について

3.1 併記語彙の種類と先行研究の見解

冒頭の図で示したように、満文本文の行間にはところどころ漢字語彙が書かれている。これらは隣接する満洲語に対応しているいわば傍訳である。康熙四十九年の序を持つ『満漢合璧西廂記』のように全文満漢併記という方法は取らず、部分的に漢字語彙が付されている。この現象については当然先行研究でも触れられている。

- a. 本文中、人名と一部の語彙には漢文の傍注が

ある。熟語や韻文にも漢文が付されている。
(黄潤華 1983:10)

- b. 全文が満文であるが、満族にとって分かりにくい人名、地名、官名及び成語、熟語、韻文などの横には漢文が付されている。(季永海 2007:65)
- c. 満族が読んでわかるように、人名、官名、地名、詩詞などの満文の横に漢文を加える。(季永海 2009:46)
- d. 固有名詞、特殊語彙には漢字で傍注をする。(王汝梅 2012)

漢字の併記される語彙が人名、地名、官職名などに集中していることは指摘のとおりである。筆者の調べによると、第1回だけで延べ700弱の箇所漢字語彙またはフレーズの併記が見られた。大部分は名前(登場人物名一本名・あだ名・呼び名一、歴史上の人物名、架空の人物名、神や仙人の名)で474例ある。次に多いのは地名(実在のもの、虚構のもの、天上にあるとされるもの、建築物など)で47例、官名は17例、職業は6例、四字以上からなる熟語、成語、しゃれことば¹⁾などが11例、書名・詞牌2例、その他がおよそ130例ある。その他としたものには楽器、動作、ゲーム、服飾品、飲食物が含まれている。一方で、漢字語彙を付す目的については「満洲族にとってわかりにくい概念を説明するため」と解釈するのは説得力を欠く。先に引いた季永海 2009:46では「順治・康熙年間(1644-1722)は漢語小説類の翻訳のピークだった」の後に続けてこうも述べているのだ。

この時期の八旗人たちはまだ直接漢語の原著を読むことができなかった(筆者注:当時読まれた小説は)すべて満文本だった。清代後期には小説は既に極めて少なくなり最も有名な『擇訳聊齋志異』は満漢合璧本である。このころは満洲語が衰退し、多くの八旗人たちは満洲語ができなくなっていたから、かれらは漢語ではなく満洲語を学んでいたのだ。

当初は漢語がわからないから満洲語の翻訳を読んでいるというのになぜわかりにくい言葉をわからせ

るために解説に使うのが漢語なのか。補助としての役割は期待できないのではないだろうか。筆者が考えるのは、むしろ満洲語主体の物語を読みながらすこしずつ漢語を学習させるための手段だったので、という可能性である。

3.2 漢字語彙併記の目的を探るために

試みとして、満文本に併記されている漢字語彙は漢文本から忠実に写し取られたものなのかどうか調査した。しかし漢文による原著は特定できていないので、2章の調査により、目下原著の可能性が比較的高いと思われる北大系統の改訂本と満文本を対照した。筆者の手元にはこの系統のうち天津本の影印本(2012年北京、線装書局)があるのでこれに拠った。

満文本第一回の漢字語彙が、天津本第一回の該当箇所でのどのように表記されているかを書き留めていった。その結果、延べ135箇所用字の違いが見られた。内訳は以下のとおりである。必要に応じ実例の一部または全部を挙げる。

I 異体字 4例

天: 冰消雪散 (2b-7) 満: 氷消雪散 (6a-7)
juhe tuhere, nimanggi wendere

II 用字や発音が異なる別の語 12例

天: 抹牌 (3b-3) 満: 骨牌²⁾ (8a-6) gu-pai

天: 寺院 (6b-9) 満: 寺廟 (15b-1) sy-miyoo

天: 僧家 (7b-4) 満: 和尚 (17a-6) hūwašan

天: 城隍社令 (12a-10) 満: 城隍土地 (29a-3)

ceng-hūwang tu-di enduri

天: 花二爹 (7a-10) 満: 花二爺 (16b-8)

hūwa-el-ye

天: 二爹 (7a-11) 満: 二爺 (16b-8) el-ye

天: 吳師父 (9a-5) 満: 吳師傅 (20b-9) u-sefu

III 登場人物の名前に対する操作。 116例

登場人物には複数の呼称がありうるが姓名の揃った形に集約する傾向がある³⁾。天津本では名だけだったところに姓を足す、人称代名詞や単に“婦人”(女)としているところを姓名にする、など。

天：伯爵 (6a-6) 満：應伯爵 (13b-7) ing-be-jiyo

天：他 (4b-4) 満：西門慶 (10b-4) si-men-king

天：那婦人 (18a-1) 満：潘金蓮 (44b-2) pan-gin-liyan

天：這元帥 (10a-6) 満：馬元帥 (23b-2) ma-yuwan-šuwai

また、末尾の“兒”を取る⁴⁾。

天：桂姐兒 (6a-7) 満：桂姐 (14a-5) gui-jiyei

天津本では省略されていた文の主語や目的語としての人名が、満文本では書き足されている場合がある。

天：路上撞着謝希大，() 笑道 (14a-8) (道で謝希大に出くわした。[謝希大は]笑って言った)

満：jugūn de siyei-hi-dai ucaraha,siyei-hi-dai injeme hendume (34a-9)

(道で謝希大に出くわした。謝希大は笑って言った)

その他の例。

天：相 (15a-9) 満：相公 (37a-6)

天津本では“若蒙恩相抬擧”となっている。恐らく語調を整えるため“相公”としなかったのだろう。満文になると漢文における語調は関係がなくなる。

IV 地名でも人名と同様の操作を施す場合がある。

3例

天：本縣 (3b-11) 満：清河縣 (9a-3) cing-ho-hiyan

天：縣 (4b-3) 満：清河縣 (10b-2) cing-ho-hiyan

以上全ての例において、満洲語は併記された漢字語彙に対応していることが指摘できる。このことから、まとまった文あるいは回を先に満文に翻訳した後、満文に合わせて漢字語彙を適宜書き足したと推測できる。

これらの例を見ていると、天津本よりも漢語が単

純化する傾向があると思われる。特に人名については、同じ人物についての複数の呼び方を覚えなくて済む、二回目以降も人称代名詞を使わず繰り返し名前を出すことで考えなくて済むようにして負担を減らしているのではないだろうか。更に興味深いのはIIである。漢語語彙でも満洲族に受容された時期、接する機会の多寡といった理由により比較的わかりやすい語彙とそうではない語彙の差というものがあるとおかしくない。外来の言葉を解説するために当該の言語の中でも先に受け入れ、馴染んでいるものを使うという事例は他の資料にも見られる。今野 2009:116 では、江戸時代に岡島冠山によって編纂された唐話辞書『唐話纂要』を紹介し、以下のような現象を指摘している。この辞書は、漢語の見出し語の右に発音をカタカナで振り、下に日本語訳を書くスタイルである。見出し語“安當”は発音が「アンタン」、日本語訳は「アンドスル(安堵する)」となっている。「安堵」はそもそも漢語である。既に日本語に溶け込んでいた漢語によって新しく入ってきた漢語を解説しているのである。この現象によって「漢語の層」が観察できると今野氏は指摘する。ただ上記の語彙がそれぞれ満洲族に受容された時期が前後するもの同士でペアを成しているかどうかという裏付けが必要である⁵⁾。このうち、“吳師父”と“吳師傅”は誤解が書き間違いではないだろうか。“師父”は僧、尼、道士に対する敬称であるが“師傅”だと師匠や親方という意味になってしまう。

3.3 満洲族にとっての「漢語の層」

前節のIIを突き詰めると満洲族の漢語受容における「層」を詳しく知ることはできるのだろうか。第2回、第3回まで調査を行ったところ、同様な例が見つかった。

第3回で“曆日”から“黃曆”に変わっている。“黃曆”は清代以降の言い方である。朝廷が黄色い紙に印刷したので“皇曆”または“黃曆”と言うようになった。満文本刊行の時点ではあってもおかし

くない語であり、こちらの方が馴染んでいたのだろう。このようにそれぞれの語の背景を確かめながら第4回以降継続して調査を行いたい。

- 注1) 漢語では“歇後語”(後半を欠く言葉)という。上の句で下の句の意味を推測させるもの。『金瓶梅』は多用することで有名。寺村2008:191によると全書から採取した136例の内91例、つまり2/3にあたるしゃれことばに漢文がそえられているという。
- 2) “抹牌”、“骨牌”は、かるた、カードゲームを指す。
- 3) “西門大人”(西門の旦那様)など天津本に書かれているあだ名、呼び名のままにしている例もある。
- 4) わずかだが“兒”を残してある例もある。天:天福兒(13a-4) 満:天福兒(31a-8) tiyan-fu-el
- 5) 底本は北大系統の別の本であるという可能性も捨てきれない。

4. 小結

乾隆年間を過ぎて満洲語が忘却されてからのことについては『清文指要』、『清文啓蒙』といった満洲語会話本の研究によってだいぶ知られるようになってきた。しかし、清初の満漢両語の接触の初期段階についてはまだよくわかっていない。『満文金瓶

梅』はこの時期のことを知るための貴重な資料である。今回の調査により底本をもう一段階絞り込むことができ、底本に近いと思われる天津本を利用した併記された語彙の対照を通して、意識的な操作の下で漢文の併記を行ったことが明らかになった。今後は「漢語の層」についての調査を続け、満洲族の初期の漢語受容について考察を進めたい。

参考文献

<日本語>

- 今野真二 2009 『振り仮名の歴史』 東京:集英社。
- 寺村政男 2008 『東アジアにおける言語接触の研究』 東京:竹林舎。
- 早田輝洋 1998 『満文金瓶梅訳注 序一第十回翻字訳注』 東京:第一書房。
- 堀川貴司 2010 『書誌学入門 古典籍を見る・知る・読む』 東京:勉強出版。

表 漢文併記が天津本とは類似の別の語になっている例

| 回 | 天津本 | | 満文本の併記 | | 満洲語 |
|---|-----------------|--------|-----------------|--------|---|
| 2 | 我與你撥火 | 4.b.7 | 我替你撥火 | 8.a.2 | bi sini tuwa bedekdebure |
| | 只要一似火盆來熟 | 4.b.7 | 只要火盆一似來熟 | 8.a.2 | fileku-i yaha-i gese oci teni sain |
| | 拳頭上也立得人, 肱膊上走得馬 | 8.b.7 | 拳頭上也立的人, 肱膊上走的馬 | 15.a.4 | nujan de niyalma ilici ombi. gala de morin yabuci ombi. |
| | 花朵身兒 | 11.b.8 | 花朵的身兒 | 19.b.4 | beye sunggeljeme ilhai adali |
| | 淮上 | 14.a.5 | 淮安 | 25.a.1 | hūwai-an |
| | 嫦娥 | 16.a.9 | 姮娥 | 29.a.4 | heng-e |
| | 做牽頭, 做馬百六 | 18.a.6 | 做牽頭, 做馬泊六 | 32.b.3 | hehe be yarhūdame yabumbi |
| 3 | 藍紬 | 2.b.8 | 藍緞 | 4.a.7 | lamun suja |
| | 白紬 | 2.b.8 | 白緞 | 4.a.7 | šanggiyan suja |
| | 曆日 | 2.b.9 | 黃曆 | 4.a.7 | hūwangli |
| | 胡桃 | 7.a.3 | 核桃 | 11.b.3 | mase usiha |
| | 折牌 | 12.b.2 | 骨牌 | 20.b.6 | gu-pai |

< 中国語 >

王汝梅 2012 「翻译书房与 < 金瓶梅 > 的满文译本」『清史参考』第 36 期。

(< 中华文史网 > <http://www.historychina.net/qsck/363260.shtml> 2016 年 3 月 30 日アクセス)

季永海 2007 「满文本《金瓶梅》及其序言」『民族文学研究』第 4 期 :65-67。

季永海 2009 「清代满译汉籍研究」『民族翻译』第 3 期 :41-49。

黄潤華 1983 「满文翻译小说述略」『文献』第 2 期 : 6-23 页。

周文業 2011 「《金瓶梅》崇禎本系統東大本研究 (代後記)」『新刻繡像批評金瓶梅』台北 : 台湾学生書局。

※この他、早田輝洋先生入力のデジタル版『滿文金瓶梅』を大いに活用した。

※本研究は JSPS 科研費 JP16K21261 の助成を受けたものです。